

シルバー産業新聞

<http://www.care-news.jp>

(平成9年11月5日第3種郵便物認可)

2017年(平成29年)

9月10日

(日曜日)

毎月1回10日発行 第251号

購読料(1年)¥7700

発行所 株式会社 シルバー産業新聞社

本社

大阪市中央区上汐 2-6-13 喜多ビル

〒542-0064 電話 (06)6766-7811 FAX (06)6766-7812

東京オフィス

東京都千代田区神田佐久間町 3-27-3 ガーデンパークビル

〒101-0025 電話 (03)5888-5791 FAX (03)5888-5792

© シルバー産業新聞社2017 禁無断転載

編集・発行人 安田勝紀

地域力 発見

宮下今日子

第56回 埼玉県さいたま市

地域福祉活動推進者研修会でVR認知症プロジェクトを体験

などが描かれる。

ビルに立っている模様。会場からは「怖い」と声が漏れる。場面が変わり、デイサービスのお迎えスタッフが「大丈夫ですよ」と話しかけてくる。しかし、怖くて大丈夫な気分になれない…。

この映像は、デイの送迎車から降りる時に「ビルの上からたたき落とされそうだった」と話した認知症の方の証言に基づいている。

同席した鈴木喜久恵氏(川口市上青木地域包括支援センター主任ケアマネ)は、確かに足が前に出ない人いますよねと話し出す。困った人に「大丈夫ですよ」の声掛けは本人にはプレッシャーだと感想がもれる。

次の映像は、電車に乗っている自分が、降りる駅を忘れてしまうという設定。降りた駅では駅員の対応がマイナチで、さらに戸惑う。しばらくすると親切な女性の声掛けで救われる。記憶をなくして戸惑う自分にとって、天使の声に聞こえた。

3つ目はレビュー小体病の幻視の映像。ケーキに虫がいて食べられない、でも勧められて困惑する様



VR 認知症プロジェクト
丁寧に説明する下河原氏

参加者は初めての体験に衝撃を受けたと話す。公益社団法人「認知症の人と家族の会」埼玉県支部の松本由美子氏は「VRで認知症のつらい思いが分かった。しかし、専門職としてどう対応するかを考えることが必要だ。また、このVRは、認知症だからではなく、相手を理解し、自分はどう対応しようかと考えることで、誰にとっても住みやすい地域になる。そのためのVRだと感じた」とまとめた。

下河原氏は、全国を回りながら「認知症は得体が知れないと思う人がすごく多いと気づいた」と話す。しかし、実際には外出も買物も、できることはたくさんある。認知症が問題なのではなく、周りの理解に問題がある。「認知症の側に立って考えよう」から出発し、理解から共感、そして自分に何ができるかを考えるきっかけにして欲しいと

すでに国からも注目され、内閣官房の「アジア健康構想」の一環で、8月にはAPECの日本的介護を紹介するイベントに参加。ユニー・チャームなど日本の代表的介護用品と並び、特設ステージでプレゼンしたそうだ。

「認知症を理解することで、自分にも何かできないかと思つて下さる方がばかり。日本人はほんと親切なんですよ」と下河原氏は力説。日本人の思いやりの心もアジアに届けて欲しいものだ。

言う。

そこで、埼玉県社会福祉協議会が8月に企画した「地域福祉活動推進者研修」の同プロジェクトに参加してみた。当日は、一般市民から専門職まで幅広く参加。約40人が4~5人のグループに分かれ、ワークショップ形式で行われた。各自、写真のようなゴーグルを装着すると、360度見渡せる世界が飛び込む。自分はどこか高い